

【執筆者の紹介】

大正十四年十一月二十九日

下津町方の小作農長男
生

昭和十五年より

海草南部青年学校在学
す

十九年六月

十月二十日

繰上げ徴兵で甲種合格
満州第六三四部隊入隊
(密山)

二十年四月

平陽の第八〇三部隊転
属

五月

八月十六日

九月

八面通飛行場挺身大隊
横道河子で武装解除
拉古に集結 作業大隊
編成

二十一年五月まで

八月

二十三年七月二十四日

アストリハンカ收容所
ラド收容所を経て
高砂丸で舞鶴復員 後
農す

現在もミカン作りをしながら製材工、ローリー運転

等元気に頑張っており、シベリア慰霊旅行には二度参加して戦友の墓捜しを行い、県支部役員として協力頂いています。

(和歌山県 林 三子雄)

シベリア抑留の記

鳥取県 谷村 憲 一

喜寿を過ぎ八十歳を迎えた私には、すべてが驚きと夢のまた夢である。静かに瞑想すれば「欲しがりません、勝つまでは」と勤勉節約の少年時代、「死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり、生死を超越して一意任務の完遂に邁進すべし」として戦った青年期、戦に敗れ屈辱の捕虜として強制労働に服した三年八カ月、戦場では傷つき倒れ苦しい断末魔の下から東方の祖国日本を伏し拜んで「万歳三唱」して去って逝った戦友達、極限の酷寒と飢餓線上をさまよったシベリア凍土の重労働等。戦争とは何か？ 敗戦とは何

か？ 捕虜とは何か？ そして平和とは何か？ 憎むべき戦争・敗戦・捕虜、万人が希求する平和、その平和をいかにして守る、このように思いを馳せながら留記を書くこととしたい。

私は鳥取の片田舎に農家の二男として生まれ、比較的健康で少年期も過ぎた頃、日支の風雲急を告げ支那事変が起こった。

昭和十二（一九三七）年七月第一動員。夏の暑い夜、初めてで聞いたこともない第一動員充員召集令状が私の部落にも四人に役場員が二人で届けられた。さあ村の中は大変なことで、三、四日のうちに鳥取の歩兵四〇連隊に入隊とのこと。年齢は三十五歳、三十歳等の人でした。

私は青年学校に通い軍事訓練も受けていた。来年は徴兵検査、いずれ軍人になる日を夢に見て心の鍛練に努め、昭和十三年甲種合格にて現役兵として歩兵第四〇連隊に入営して厳しい軍隊生活に入る。部隊は北支戦線で活躍有名な長野部隊である。私達は留守隊で一

期の検閲を受け、北支戦線へ出動。私は召集兵の教官係として鳥取で一年間で上等兵となり、下士官候補者として教導学校豊橋に派遣になり昭和十八年伍長に任官、大隊本部、連隊本部の書記を務め、部隊は満州東安省平陽九六〇部隊として永久駐屯となる。

昭和十八年、新しい部隊編成のため掖河二六七連隊に転属、連隊本部書記を務め、昭和二十年三月陸軍准尉に昇進し、三月遼陽予備士官学校に入校を命ぜられ、三月二十日出発、三月二十三日遼陽予備士官学校学生として将校に必要な教育訓練に熱中した。小高い丘の上に立派な三階建ての洋館造りの学校で、すぐ前は遼陽の街が一面に見渡せる広大な平野である。また右の山は日露戦争で有名な橋山である。毎日毎日厳しい精神訓練そして戦術の連続であった。こんなに鍛えられて六カ月が過ぎ、十月十日で卒業予定であった。

八月九日、夕食を済ませ一休みしていたところ、非常呼集のラッパが鳴り、すぐに服装を整え営庭に集合した。学校長杉山少将曰く「ソ連侵入せり、君たちは明朝原隊に帰れ」、学校は解散とのこと。一望見渡せ

ば遼陽、鉄嶺の街は満人の暴動で火災が至る所で発生している。これは大変と私達は身辺を整え、夜の明けを待つ。

八月十日朝六時、遼陽駅に軍用トラックにて着いてみると大変だ、北に行く列車はない。北より避難列車が在留日本人を満載して次から次へと南下してくる。婦人子供達、ただ着の身着のまま風呂敷包みを両手にさげて必死に汽車にへばりついている。また駅前の街の中も満人の暴動で、至るところで略奪、そして放火、それも日本人はただ見ているだけで抵抗もしい。憲兵、警察とてどうしたとか一向に知らぬ顔でどこかへ身を変じているとのこと。

私達は一時も早く原隊復帰せねばならない。牡丹江第五軍司令部の配下派遣されていた准士官、軍曹一等級十人は、交通公社より軍用トラックを用達してくれて二台に分乗、赤鹿兵団のいる鏡泊湖へと分かれぬ道を地図を頼りに日夜走り続けて一週間程度かかって漸く師団司令部に到着。師団各部隊の陣地配備に就き、歩哨を通じて連絡を取り、その夜は野外天幕の中で一

夜を明かす。朝八時、赤鹿師団長に帰隊の申告、師団長も大変喜んで、恩賜煙草をいただいたことを記憶している。師団副官より原隊の居処の指示を受けて、訪ねて到着したのが夕方だった。

部隊長も副官も陣地で大変喜んで頂き、早速戦闘体制に入る。前方七百メートル、双眼鏡で見ればソ軍の戦車が五台列を作り前進して来る。陣地では対戦重砲にて応戦。一週間程度交戦したが、ソ軍は陣地は避けて進攻してくるので裏はソ軍が既に回っている。そうこうするうちに空から日本軍降伏、天皇陛下の終戦の詔勅があった。陣地では最後の戦闘を準備しつつも、夜、部隊長より幹部将校達に集合とのことにて一同は壕内へ集まる。部隊長より無条件降伏、明日は武装解除とのこと。この話を聞き、将校以下誰もが黙って何も言う者がなく、情けない屈辱である。いたし方なくこれも運命だ。

兵器、弾薬全部を並べ、私達は丸裸になってなすがままとなり、ソ軍の将校兵達を眼の前に見るようになった。通訳を通じて蘭崗の飛行場に集合せよとのこ

とにて、三日徒歩で途中で食事をとり漸く到着した。幸いにして私は独身者で二男だ。条件はよく、何もかも運を天に任せて行動することとしたのもうどうにでもなれだが、中には家族や家のことなど案じて心配でならない者もあり、自分が倒れたらそれこそ大変だぞとお互いに励ましあつて、これからのことを考えて行動しなくてはならないと心に誓う。

飛行場に集まつたのは軍人、在留の日本人も大人、子供、婦女子と混同で、ここで軍人は別々にされて一千人単位で掖河で貨車に乗せられ、「東京ダモイ」とソ連の兵士は言っていたが、一貨車二段四十人、二十五両一千人がソ連の輸送指揮官カチエンコ大尉の指揮下に入り綏芬河より入ソ、九月十日頃と思う、北へ北へ。

十五日位かかって「コムソモリスク」北三百キロメートルのムリー地区三〇八收容所に到着。見渡す限りの何も無い広野原に、百メートル四方位の囲いを鉄条網と柵で作って、四隅には歩哨の監視する所がある。丸太で作った小屋の腰に土をかけて覆った建物

で、ドイツ人の收容所の後、日本人の收容所にしたのである。

「この三〇八收容所が作業をする拠点である。皆協力して身体を守り働くように」と高橋隊長から訓辞があつた。收容所は丸太を組んだ掘建て小屋で、もちろん電灯があるわけではなく、ランプ、ロソクもない。白樺の油煙が部屋いっぱいたちこめ、人間の顔や手も真っ黒になる。洗顔する水もないので入浴もできない。食べ物は一皿黒パン三〇〇グラム、塩漬けの魚を煮出したスープが飯盒半分くらいであつた。

夜は南京虫、シラミが多くて眠れぬ夜が続いたこともある。何分寒いのと重労働で食べ物も少なく、日増しに体力は衰えてしまい、昨日一人、今日二人と栄養不足に。医者はいても薬がない。一度発熱でもしたら直す方法がなく、何分言葉が分からないのが一番困つてロシア語の勉強をしたものだ。重労働で毎日毎日ノルマで追い立てられ、牛や馬よりもひどい扱いを受けて命を奪われた同胞が数知れない。

入ソ一年間に死亡者が多く、二年後には何かとソ側

も取扱いがよくなったように思う。入院を何度か繰り返し、栄養失調で五十メートルも歩けば倒れて立ち上がる事ができず、伝染病赤痢にかかり一カ月入院したこともある。作業といえばモミ、カラマツ、シラカバの木等の伐採、バラスの貨車積み降ろし、れんが造り、貨車降ろし、コルホーズ農業、大工、左官等あらゆる重労働を強要され、ダバイダバイと追い立てられること毎日。食物も与えられずいつまでも帰さないことが毎日のようで、これでは大変とソ連側に異議を申し立て、逐次すべてが緩和されて少しずつ楽になり、将校は別の収容所へ移動。民主運動も盛んになり、作業その他についても連絡とれて、ただ帰国を待った。

三年半を過ぎ、いよいよ帰国となりナホトカへ向かう。約一週間検査で追われて、帰国の同胞達といよいよ乗船、英彦丸に千人単位で。懐かしい日本の看護婦を見て、何て綺麗な美しい娘さんで、ああ生きていてよかったですと安堵の胸をなでた。ナホトカの浜は日本人で埋まっている。浜辺に立ち並んだ天幕の行列、ここに共産党の宣伝部も構え、部員はほとんど若者で、飛

び回っている。毎日私達は「赤旗の歌」から始まって「同志よ堅く結べ」「メーデーの歌」など、来る日も来る日も歌で明け、歌で暮れる毎日であった。

ナホトカに来てちょうど十日ほどたち、乗船のための準備である。港の近くで身体検査、持ち物の検査もされた。

総てを終え、足は乗船にと棧橋に向かい船上の人となる。二十分程走ってソ連の乗員は下船してソ連へと帰って行った。やれやれこれで本当に日本に帰れる。船の中の船員、特に美しい看護婦の優しい接待に感謝しながら気も心も解放され、ゆっくりと一夜を明かす。遙か遠くに見える山は舞鶴だと聞く。甲板デッキで、幾年ぶりの故国の土を踏めると皆喜びでいっぱいだった。

もっともっと書きたいことは山ほどあるが記憶が乏しく、国語の辞典なくしては書けない。体力視力も限界で、残念ながら失礼することといたします。

思い起こせば、あの酷寒の地で凍土に骨を埋めた六万三千余人の同胞に対して、黙禱せずにはいられない

日々である。

帰国後五十数年を過ぎた今日、いまだに年一、二回シベリア抑留中の夢を見るのである。いかに三年八月のシベリア生活がつかったか。「ダモイ」帰国の言葉を信じ抵抗もなく連行されて以来、苦しみ、諦め、そしてなお生きようとした悲しいまでの人間の姿。望郷の念に支えられて生き抜いた困苦欠乏の日々を私は終生忘れないであろう。

【執筆者の紹介】

現住所 鳥取県八頭郡用瀬町鷹狩

大正七年九月一日生

学歴 高小卒

軍歴 昭和十三年一月十日

現役兵として
鳥取歩兵第四

○連隊入隊

昭和二十年二月一日

任 陸軍准尉

昭和二十年九月十日

蘭崗 武装解

除

昭和二十年九月二十五日 入ソ ムリ

収容所

昭和二十四年七月二十日 英彦丸 舞鶴

復員

職歴 復員後 農協職員

農協退職後 社会福祉協議会勤務

同右退職後 用瀬町老人クラブ連合会長

軍人恩給友の会会長

現全抑協鳥取県連合会用瀬町支部長

叙勲 昭和六十五年 勲六等瑞宝章受賞

(鳥取県 松下 盛一)

抑留記

鳥取県 井上平夫

内務人民委員部チタ監獄に収監

シベリアの最酷寒期は万物が凍る。昭和二十四(一九四九)年二月二十二日(火曜)暗くなって作業から